

六花

RIKIWA

7

俳句雑誌りつか
2016 (平成27年)

cover design Yuna Mizuno



こん
今

遊び舟

山田六甲

濡舟に遊ぶも一期一会かな
おほどかや梅雨田濁りを湖は入れ
笠脱ぐや日焼の顔のさみだれて
落人の裔は細鼻水鶏啼く
梅雨冷の舟にどてらをあてがはる
靴下の濡れて五月雨男かな
五月雨るは百も承知や葭よじめぐり
血を分けしゆゑに蚊を打つ憎まねど
半夏はんげ生おふ湖国に夕を惜しみけり
短夜の水より明けし近江かな
信長に気性は遠し洗鯉

黒南風に夕変りして湖の色
流木に黒南風の寄す汀かな
足跡の夕日にくぼむ梅雨晴間
めん鶏はおん鶏に老い青田風
歩みつつ日傘をたたむ女おみなかな
湖風の田へ来て遊ぶ半夏かな
絵馬涼し迦陵頻伽の音を立て
真まっばだか裸湖の暮るるを見てをりぬ
梅雨冷の浜へ出る下駄二つあり
鮒死して白し湖国の五月雨も
またもとに戻るが舟の遊びかな

雪嶺抄

桜・さくら

笹村 政子

さくら散る海を眼下に蕪村の碑
風止みて沖のあかるき朝桜
朝空の湿つてをりし八重桜
花筏風の生れたる向かう岸
花冷の坂に遇ひたる少女かな
対岸を少女駈けをり花の雲
だしぬけに鶉越の花吹雪
老舗とは軋みてこそぞ花の宿
呼び寄せし父の見あぐる桜かな
花冷の窓に麻酔の覚めにけり

雪卿集

流 鏑 馬

佐 津 の ぼ る

野の川の水にうなづく芹を摘む
庭雀交みそこねてとび発てり
ひつそりと落ちて嵩なす椿かな
流鏑馬の跡の春泥荒れてゐし
暮れ遅し旅の途中の書肆に寄る

春 の 昼

出 口

誠

のこぎりのやうな花びらチューリップ
昼下がりに藤の花房咲きはじむ
水槽の上に咲きたる藤の花
川えびの移し変へらる春の昼
不規則にあぶくの出づる春の昼

雪卿集

花 屑

升田ヤス子

芽柳に公園深くなりにけり
矮鶏の尾の枝垂るる梅に触れにけり
幾たびも箆筒に背伸び花衣
髪しとど濡れきて花の雨と知る
掬うては浴びる花屑下校の子

蒲公英

市川伊團次

蒲公英の絮のひとつを追うてをり
行く春に風はときをり強くあり
葉桜に憩ふは我の足と靴
蒲公英や外来と言ふ命かな
歩きをり止まるも行くも花の道

芽柳に公園深くなりにつけり

升田ヤス子

めやなぎにこうえんふかくなりにつけり ますだやすこ

矮鶏の尾の枝垂るる梅に触れにつけり

幾たびも箆笥に背伸び花衣

髪しとど濡れきて花の雨と知る

掬うては浴びる花屑下校の子

春の芽吹きによつて柳の枝垂れが目立ちその奥の公園がますます遠ざかり水の底を覗き込むように深くなつてきた。そういう気がするというのだ。芽柳が官中という御簾のような役割をしていると思えばいい。うす緑の紗によつて向こう側はよく見えない。見えるか見えないかの曖昧さが奥を深くしているという捉え方がいい。深窓を覗き込むような感覚で出来た句というべきか。物事も実景も少し見えにくいほうが興味をそそれ気になるのである。また芽吹きの頃のぼんやりとした気持ちと相俟っている。

えんぴつの筆圧弱き入学児

住田千代子

不揃ひの野菜をひさ販ぐ梅の村

春雨や湿りわづかな傘たたむ

浅き春匙にふるへる離乳食

潮入りの川に漂ふ若布かな

えんぴつの筆圧弱き入学児

えんぴつのひつあつよわきにゆうがくじ すみだちよこ

教師の鋭い眼差しは入学児の筆圧の弱さを洞察。筆圧でその児童の発育状態、健康状態、精神状態、家庭事情まで診断できるのはある意味で医師以上の眼。このような人に子どもを預けている親にとって、これほど心強いものはないだろう。職業の目とも言えるが、これほど教師を侮辱した言葉は無いので、人間としての目と言い換えよう。他人の子ではあるが母の目でもあり、その愛情は入学したばかりの、幼い子どもの脳裏に強く焼き付けられ、生涯忘れないであろう。またその子が教育に携わるようになったら。同じような教師になる。

雲樹集

乙女椿
廣畑育子

瀬の音に花かたかごの俯むけり
野仏に花かたかごの咲きにけり
色褪すも三楹の花溢れけり
雲梯の子の髪に降る桜かな
乙女椿漢まばたき忘れけり

若布
住田千代子

不揃ひの野菜をひき販ぐ梅の村
春雨や湿りわづかな傘たたむ
浅き春匙にふるへる離乳食
潮入りの川に漂ふ若布かな
えんぴつの筆圧弱き入学児

蛩雪譚

六甲選

※「格に入りて格を出でざる時は狭く、また格に入らざる時は邪路にはしる。格に入り、格を出でて、初めて自在を得べし芭蕉」(『祖翁口訣』)は芭蕉の言葉ではないという説もあるが、だれが言ったというよりの射た言葉である。格とは基本であり品格。

二十七年七月号鑑賞

私は人の個性を伸ばす方法ばかり考えてもう二十五年を過ぎた。ところで個性とはそれぞれの味であり灰汁の味ではないかと考える。薬味だけを食べても美味しいと思わない。うどんに辛子、カレーにターメリック、ピザにバジルがなければ風味もなからう。そのことは俳句にも言えるのではないか。毒にも薬になり得るし、薬味もそれにあたる。しかしそれが前面で主張すると駄目で、仄かに香るていどがいい。一番こまるのは毒にも薬にもならない物。とここまで書いたが、もしかしたら「與朋友交而不信乎。傳不習乎。」ではないかと怖れている。この意味は編集後記に。さてこのところ少しづつ灰汁(風味・情)が出て来た政子の作品から見ている。

さくら散る海を眼下に蕪村の碑

笹村 政子

固有名詞を使つた名詞止めの句。桜が海へ向かつて散っている光景かと思う。友周子郷は「句碑はいつ建立されたかは不詳だが、須磨浦公園の西の坂道に、この句(春の海終日のたりのたり哉)を刻んだ立派な句碑がある。そこからの眺めはまさしくこの句(蕪村の)の趣である」という。それを政子の句に当てはめてみたところ鑑賞に悩む私が居る。桜が蕪村の句碑に散っているのか、海にむかつて散っているのが明白でない事。しかし、散る海がこ



の句の眼目ではなく、散る桜が眼目で、海も句碑も包んで華やかな景色を作り出していると鑑賞するほうが楽しい。海を眼下にする蕪村の句碑は須磨浦公園を西側坂がかりの「春の海ひねもすのたりのたりかな」の句碑。それに呼応した挨拶句として読み解きたい。以前、私はそこに佇んで、かの有名な「須磨の月」を実感した。かつて、滝瓢水が加古川の自邸で、姫路のお殿様をもてなしている最中に中座して須磨の月を見に行った場所。命懸け（彼は意識しなかったが）で瓢水が見た須磨の月ばかりでなく、花の散る須磨も見事な場所であることをこの句によって知った。もう一度行ってみたい。

六花集

七月号



平居 滯子
時計台父母の母校に入学す
天折の陶工の皿おぼろかな
春眠を胎児とともにむさぼりぬ
恋知らず長寿表彰されし猫
春灯下付箋の花の旅雑誌

延川五十昭

夙川の蕎麦湯啜れば花吹雪
城濠に風の渦巻く花筏
道産子の背に振りそそぐ花吹雪
花冷えに宿の灯の暖かさ
花吹雪戦の濱に舞ひにけり

延川 笙子

何事もなかりしごとし桜咲く
花好きの故人に一枝手向けけり
それぞれの日々の暮しに桜咲く
納骨の墓前に桜舞ひにけり
虫になり齧りてみたし柿若葉